

滋賀県東近江市・永源寺地域ルポ

2人に1人が自宅で最期



死ぬまで家においたら、ええんやで。滋賀県南東部の山あいに、住民の2人に1人が自宅で亡くなる地域がある。5300人ほどが住む東近江市永源寺地域。医師は2人、入所できる介護施設も2カ所しかないが、住民同士が肩書を超えてチームをつくり、望み通りの最期を迎えられるよう一役買っている。先週、現地を訪ねた。



住民結束し支える

声が届いてくる。20以上の集落が点在し、高齢化率は35%を超える。毎年、60人前後が亡くなるが、在宅医師(48)だ。入院設備は無く、地域の保健福祉を支えている。

外来診療のほかに約70人の在宅医療も担っている。「お迎えがきたらどないしますか」。訪問診療で患者に会うたび、こう尋ねている。「死をタブー視せず、常に気持ちの確認をしておくため」だという。1人暮らしの小杉茂さん(95)は

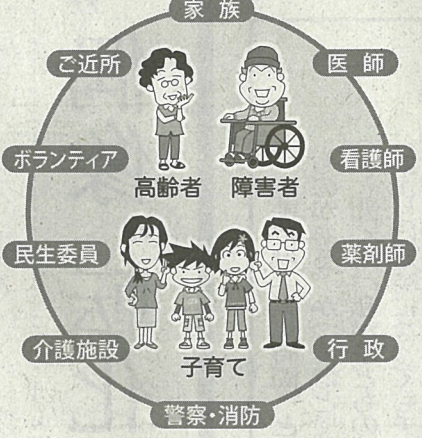
かごしま
いのち
見つめて

「家が一番楽やわ。まだお迎えは来そうにないけどな」と笑わせた。

診療自体は数分だが、世間話をしながら帰ることも珍しくない。花戸医師は「医療を家に届けることが仕事ではない。その人の人生がどうすれば豊かになるか、一緒に考える時間が大切」と強調した。

花戸医師とともに活動するのが、「チーム永源寺」。看護師や薬剤師といった専門職だけでなく、商工会員や地域おこし協力隊、警察官や消防士らさまざまな立場の住民が緩やかに連携す

チーム永源寺のイメージ



患者との対話を大切にする花戸貴司医師(写真左)=1日、滋賀県東近江市の永源寺地域

深い山の中に集落が点在する
永源寺地域
11月31日



る。定期的に集まっては支援が必要な人の情報を交換している。チームには、地元ボランティアグループも加わる。診療所への送り迎えやごみ出しを手伝う。代表の川嶋富夫さん(71)は「チームとしての意識はあるが、特別なことはしていない。各自ができること、気付いたことをやる中で、何か協力がほしいときに連絡できる関係ができた」と話す。

「社会的弱者を元氣な人が支えるという構図は、勝手な思い込みだった」と明かすのは、民生委員の九里美和子さん(67)。認知症の80代女性の見守りを、近所に住む足腰の弱い90代女性に頼んだところ、一緒に買い物に行ったり、おしゃべりをしてもらうようになったという。

花戸医師は「お互いさま」を合言葉に、安心して生活できる地域を全員でつくっているという感覚。一人一人がちよつとずつ支え合うことで、希望の最期を最大限かなえられる環境が生まれるのではないかと訴えた。(中映貴検)